

主 文
原判決中被告人に関する部分を破棄する。
被告人を懲役二年に処する。
当審における訴訟費用は全部被告人の負担とする。

理 由
被告人及び弁護人の各控訴趣意は別紙のとおりである。

右弁護人の控訴趣意第一点について。

刑事訴訟規則第二百十八条によれば地方裁判所家庭裁判所又は簡易裁判所においては判決書に起訴状に記載された公訴事実又は訴因若しくは罰条を追加若しくは変更する書面に記載された事実を引用することができるので〈要旨〉あるしかして引用する場合は単に右引用のなされたことが判決書に明白に記載されることを以て足り所論の〈要旨〉如く更に其の書面の謄本、副本又は写本を添付するの必要は毫もない又引用する部分はその記載の全部たると一部たるとを問はないことは勿論一部を訂正変更し又は削除附加して引用することもできるとは解せられるけれども判決書における右引用の記載は引用された起訴状等の記載と相俟つて一見容易に罪となるべき事実を明確に把握し得るに足る程度のものでなければならぬと考える従つて右訂正、削除、附加等が多岐に亘り罪となるべき事実を把握するに多少とも労苦を伴うような引用の仕方は到底妥当とは言えないのみならず延いては罪となるべき事実を不明確ならしめ判決に理由を附さないか又は理由にくいちがいを生じ判決破棄の理由となるを保しがたいのであるこれを本件について検討して見ると原判決には「罪となるべき事実の摘示については起訴状公訴事実を引用する但し昭和二十六年三月十五日附起訴状公訴事実中第一の（一）（二）を次の通り変更判示する

第一 被告人Aは……

（一） 昭和二十五年二月四日……

（二） 同年二月二十日……

次に昭和二十六年三月三日附起訴状公訴事実冒頭並に第一、第二、第三を夫れ夫れ罪となるべき事実の判示冒頭並に第一、第二、第三とし同年三月十五日附起訴状冒頭並に第（一）（二）（三）（四）（五）（六）を夫れ夫れ罪となるべき事実判示冒頭並に第四の（一）（二）第五の（一）（二）（三）（四）（五）（六）として引用する」と記載されているのであるが右の記載文言によれば原判決に記載された罪となるべき事実は

一、 本件昭和二十六年三月三日附及び同年同月十五日附各起訴状記載の公訴事実

一、 昭和二十六年三月十五日附起訴状中公訴事実第一の（一）（二）を変更判示した事実

一、 昭和二十六年三月三日附起訴状記載の公訴事実

一、 昭和二十六年三月十五日附起訴状の冒頭並びに第一（一）乃至（六）記載の公訴事実

となるのであつて犯罪事実の記載が前後重複するのみならず原審第一回公判期日において本件公訴事実の字句の一部が訂正されており且又他に公訴事実を変更判示すべき部分もあるのであるから起訴状記載と相俟つも罪となるべき事実を明確に把握することができない結局原判決には理由を附さない違法があると謂わねばならないので論旨は理由があり破棄を免かれない

しかして被告人の控訴趣意及び弁護人の右控訴趣意第二点については後記破棄自判の項において自から判断するところであるから茲にこれを省略し刑事訴訟法第三百九十七条により原判決中被告人に関する部分を破棄し同法第四百条但書に則り更に判決する

罪となるべき事実

被告人は夕張市a町b丁目夕張市役所会計課経理係として消耗品等の調達並びに出納保管等の業務に従事していたもの原審相被告人Bは同市a町b丁目C印刷所の外交並びに会計経理関係一切を処理し紙の売買印刷、紙の切断等の業務に従事していた者原審相被告人Dは北海道空知郡c町字d番地財団法人E外交員として同社扱いの簞、雑巾、はたき等荒物雑貨類の販売集金等の業務に従事していたものであるところ被告人Aは

第一単独で

（一） 昭和二十五年二月四日頃夕張市役所において右Eより同市役所に同日頃雑巾千枚一枚につき六円五十銭合計企六千五百円及び簞二百本一本百二十円合計金二万四千元総計三万五千元として納入されたのを奇貨とし其の単価を偽り真実の代

本邦に偽し、同円金一偽百虚なれ頃千せと本を二のをず日八金円百価円義続い三万送千二単十名手は月二に八簿の四各額三金E万に其百長の金年に右二所てき社裁び同下て金役しつE決及て名つ右市とに記の価つ金もめ同貨本前共単因代をしり奇一宛びのめの手せよを第G及び品しそ切領Eのを役払物さて小受け記た金入支右なしのを遂前れた代收金を面金ををてさ等市代し裁し額該的にい入之同がを決係額て目お納てこれKの納同しの騙にて企ひこ長令出右を取所しを並頃係命所のO騙役ととFの理出演行事き市円こ長其経支市発行つ記千人上課金同店株に日前四せ張した同代支専円日万取夕しJがな同社千九十二詐の成長らて同四金二を旨作課せ知じない金二月計額るを計さを通な額三月合差あ通会信情をら差年円ので一市誤て店知のと十と円書同とい支をと二金千領IのおN情円百代八受役もに行頃千(つき)の万求助な所銀の四に真金の同正市をめ二

第二原審相被告人Bと共謀の上

よこ旨三校入二二却代收二の
所した十学納書売が市納月締
役すし月小々領領をれ同却同三
市入入二S夫受受締こI売て十
張納納十円を求求三役りつ五
夕に却年百当請請十装助よ因紙
が校売同二相の五旨市所め更
所二にて千円内容計る同刷しり
刷外校企七百内内合なP印さよし
印校学を万三偽偽紙当長CなL取
同学校各と一千虚虚更正係にを員騙
て小右こ金四宛右紙は理枚裁納を
いQをん代金Gは半入経学決出れ
お市紙せ締代役A々々納課各の所こ
に同更取十締入人夫却計右令役て
室判詐四十締入人夫却計右令役て
務断半円更更同て二同ず支てを
所切の金判判にい外し頃い金付
刷を有に紙紙びにお校為日は代お交
Cこれ所下半半並に学を五締がにの
右り刷所名にF所小明十三れ所円
頃預印代小学市長役Q証二十役十
日をCの小学市市市市市市市市
三紙右其Q中張右張入二紙さ同百
十更しり市市張名四日前的偽同紙旨人二
月判所とよ張張名四日前的偽同紙旨人二
大貨所夕夕B十よ虚り半る告万
二奇役り円所翌所の取右あ被二
十有を市よ十刷し刷旨をてで相金
年所の右所九印成印た続しの審現
同所右所九印成印た続しの審現
二布な装同千旨夫々らの等た頃下
（二）役つし印三の々々らの等た頃下
左額並二同に偽に締たをに入支役ら八金
り同とを日三し通通納金入せ十代

第三原審相被告人Dと共謀の上

[illegible]

金二万八千円右雑巾千枚の分については一枚十二円合計代金一万二千円右簿百本のの
分については数量百九十本合計代金二万六千六百円との請求の記載及び決裁の金額及び簿九十
に同市収入役G宛財団法入E社長H各請求の受領書の回付夫々の命令の役所出納係との差額金
その頃同市役所においてこれが代金支払の手続をして各被告Dは同市役所において原審相被告人
も正当なる旨装束P並びに同市収入役G等をして右請求受領書記載の物品納入があつたものと誤信させこれが代
会計課経理係長P並びに同市収入役G等をして右請求受領書記載の物品納入があつたものと誤信させこれが代
本の納入は間違った同市役所において原審相被告人Dは右市役所出納員Lより右代金名下に現金二万八千円の交付を受けてこれを騙取
て同年四月十二日頃同市役所において原審相被告人Dは右市役所出納員Lより右代金名下に現金二万八千円の交付を受けてこれを騙取
等の代金名下に合計金六万六千六百円の交付を受けてこれを騙取
万八千六百円の騙取を遂げ

(二) 同年五月八日頃夕張市役所において前記Eより右市役所に物品納入の事
実がないのに同年四月七日座敷簿百一本につき百四十円代金合計一万四千円総計金二万八千円の夫々
同日頃座敷簿百一本につき百四十円代金合計一万四千円総計金二万八千円の夫々
夕張市長F並びに同市収入役G宛前記E村長H名義の虚偽の請求受領書二通を作成
した上其の頃被告人Aはこれが支払手続並びに決裁に出し同市役所助役I並びに同
市収入役G等をして右請求受領書記載の物品納入があつたものと誤信させこれが代
金支出命令の決裁を為さしめ因つて同年五月九日頃同市役所において原審相被告人
Dは右市役所出納員Lより右代金名下に現金二万八千円の交付を受けてこれを騙取
し

(三) 同年六月八日頃夕張而役所において前記Eより夕張市役所に簿等の納入
事実がないのに同年五月七日座敷簿七十本一本につき百四十円代金合計九千八百円
及び同日座敷簿八十本一本につき百四十円代金合計金一万二千二百円総計金二万二千
の夫々夕張市長F並びに同市収入役G宛前記E社長H名義の虚偽の請求受領書二通
を作成した上其の頃被告人Aはこれが支払手続並びに決裁に出し同市会計課長J
同市助役I並びに同市収入役G等をして右請求受領書二通に記載の座敷簿計百五十
本の納入があつたものと誤信させこれが代金支出命令の決裁をなさしめ因つて同日
頃同而役所において原審相被告人Dは同市役所出納員Lより右代金名下に現金二万
千円の交付を受けてこれを騙取し

(四) 同年七月二十四日頃夕張市役所において前記Eより同市役所に雑巾等の
納入の事実がないのに同年五月下日雑巾千枚一枚につき十二円合計代金一万二千
円同年五月二十一日座敷簿三百本一本につき百円十円代金合計四万二千円同日雑巾
三百枚一枚につき十円合計代金三千円同年六月三十日雑巾千枚一枚につき十二円合
計代金一万二千円の夫々夕張市長F並びに同市収入役G宛前記E社長H名義の虚偽
の請求受領書四通を作成しその頃これが支払手続並びに決裁に出し右請求受領書
四枚の中前記五月十七日雑巾千枚金額一万二千円五月二十一日座敷簿三百本金融
万二千円及び同日雑巾三百枚金額三千円の夫々の分についてはその頃六月三十日雑
巾千枚金額一万二千円の分については同年九月四日乃至同月二十日頃迄の間に同市役
所会計課長J同市助役I並びに同市収入役G史に同市会計課経理係長P(六月三日
の雑巾千枚のみ)等をして右夫々の請求受領書記載の雑巾並びに簿等はいずれも間
違なく市役所に納入されたものと誤信させこれが代金支出命令の決裁をなさしめ因
つて原審相被告人Dは同市役所において右市役所出納員Lより何年七月二十九日頃
右五月十七日納入雑巾千枚分右五月二十一日納入座敷簿三百本分及び同日納入雑巾
三百枚分の代金名下に合計金五万七千円又同年九月二十二日頃右六月三十日納入雑
巾千枚分代金名下に現金一万二千元合計金六万九千円の交付を受けてこれを騙取し
市千枚分代金名下に現金一万二千元合計金六万九千円の交付を受けてこれを騙取し

(五) 同年十月十二日頃前記市役所において右Eより右市役所に対し同年八月
二十日頃簿百五十本一本につき百十円合計代金一万六千五百円が納入されたのを奇
貨とし取引数量を偽り真実の代金との差額を詐取せんことを企て同年八月十日頃座
敷簿二百五十本が一本につき百二十円代金合計三万円で納入された旨の夕張市長F
並びに同市取入役G宛前記E社長H名義の虚偽の請求受領書一通を作成しその頃こ
れが支払手続並びに決裁の為回付し同市助役I同市会計課長J同課経理係長P並び
に同市収入役G等をして右請求受領書記載の簿二百五十本が納入されその単価並び
に金額等は何れも間違いない旨誤信させこれが代金支払の決裁をなさしめ因つて同
市役所において原審相被告人Dは右簿代金名下に現金三万円の交付を受けて右金一
万六千五百円との差額金一万三千五百円の騙取を遂げ

(六) 同年十一月二日頃前記市役所において右Eより右市役所に簿或は雑巾等
の納入の事実がないのに同年九月四日座敷簿三百本一本につき百四十円合計代金四
万二千円及び同年十一月二日簿三百本一本につき百四十円合計代金四万二千円同日
雑巾千枚一枚につき十一円合計代金一万千円二口計五万三千円がいづれも納入され

た旨の夕張市長F並びに同市収入役G宛前記E社長H名義の虚偽の請求受領書二通
を作成し其の頃これが支払手続及び決裁の為同市役所事務員Uに回付し右請求受領
書中同年九月四日納入座敷第三百本金額四万二千円の分については同年十一月七日
頃乃至十一月十五日頃迄の間に又同年十一月二日納入簿三百本及び雑巾千枚計金五
万三千円の分については同年十一月二十九日頃乃至十二月四日頃迄の間に同市助役
I同T同市会計課長J同課経理係長P並びに同市収入役G等をして右二通の請求受
領書記載の物品は夫々何れも納入されたことが間違いないものと誤信させこれが代
金支出命令の決裁をなさしめ因つて同市役所において原審相被告人Dは同市出納係
員Lより物品代名下に右九月四日納入座敷第三百本の分については同年十一月十五
日頃現金四万二千円を更に右十一月二日納入簿及び雑巾の分については同年十二月
四日現金五万三千円を夫々交付させてこれを騙取し

たものである

証拠の標目

判示全部の事実につき

- 一、 原審第一回公判調書中の被告人Aの供述記載
- 一、 検察官作成の被告人Aの第一乃至第四回各供述調書
- 一、 司法警察員作成の被告人Aの第一乃至第十四回答供述調書
- 一、 司法警察員作成のGの第一、二回各供述調書
- 一、 検察官作成のLの第一回供述調書

判示冒頭被告人A、原審相被告人B、Dの各職務地位につき

- 一、 司法警察員作成のGの第一回供述調書
- 一、 検察官作成の原審相被告人Bの供述調書
- 一、 検察官作成のOの第一回供述調書

判示第一の(一)事実につき

- 一、 G作成の顛末書(昭和二十五年二月二十五日附のもの内記録四十八丁、
四十九丁、五十丁)三通判示第一(一)(二)の各事実につき

一、 押収に係る札幌地方裁判所昭和二十六年押第五十一号の証第八号戻入通知
書及び領収証の存在

判示第一(三)の事実につき

- 一、 司法警察員作成のGの第一回供述調書

判示二(一)(二)の事実につき

- 一、 原審第一回公判調書中の原審相被告人Bの供述記載
- 一、 検察官作成の原審相被告人Bの供述調書
- 一、 司法警察員作成の原告相被告人Bの被疑者第一、二回各供述調書

判示第二(一)つき

- 一、 押収に係る札幌地方裁判所岩見沢支部昭和二十六年押第五十一号の証第一
号B作成請求受領書(昭和二十五年八月二十七日附)の存在

判示第二(二)の事実につき

- 一、 司法警察員作成のPの供述書
- 一、 P作成の昭和二十六年二月二十一日附顛末書二通
- 一、 押収に係る札幌地方裁判所岩見沢支部昭和二十六年押第五十一号の証第二
〇号の一B作成の請求受領書及び同号の二同上人作成の請求受領書の各存在

判示第三(一)乃至(六)の各事実につき

- 一、 原審第一回公判調書中原審相被告人Dの供述記載
- 一、 検察官作成の原審相被告人Dの第一回乃至第四回各供述調書
- 一、 司法警察員作成の原審相被告人Dの第一乃至第七回各供述調書
- 一、 押収に係る札幌地方裁判所岩見沢支部昭和二十六年押第五十一号の証第五
号各請求受領書の存在

- 一、 検察官及び司法警察員作成のOの各第一回供述調書

- 一、 O作成の夕張市役所取引一覧表

法令の適用

被告人Aの判示所為中詐欺の点は刑法第二百四十六条第一項(共謀の点は同法第
六十条)に業務上横領の点は同法第二百五十三条に各該当するところ以上は同法第
四十五条前段の併合罪であるから同法第四十七条本文第十条により犯情の最も重い
判示第三の(六)の詐欺罪の刑に法定の加重をした刑期範囲内で被告人Aを懲役二
年に処すべく刑事訴訟法第百八十一条第一項に則り当審における訴訟費用は全部被
告人の負担とし主文のとおり判決する

(裁判長判事 黒田俊一 判事 鈴木進 判事 東徹)

